

現職教員のダンス指導実践に影響を及ぼす要因の検討

——大学時履修経験が与える影響について——

松本富子・高橋和子・茅野理子・細川江利子
佐分利育代・廣兼志保・畑野裕子

〈はじめに〉

教員養成大学におけるダンス教育は、小学校・中学校・高校におけるよりよい指導実践を図るために、将来教員としてそこに関わる優れた人材の育成をめざして進められている。具体的には、さまざまな教育課題の設定と解決策の開発を進め、ダンス指導実践に対する有効な教育プログラムを開発して、意欲と自信を持った教員を育成することを役割としている。さらには、現職教員の指導や情報提供をするセンター的役割についても期待されている。

教育現場においては、近年では、指導法の開発や定着による教育実践の進展が見られる。その一方では、学校間の指導実践の格差とそれともなう小学校・中学校・高校における指導の非連続性など、ダンス指導に関わる問題点も見受けられる。

また、平成元年度以降の指導要領改訂により、中学校以降では選択性・男女共修が導入され、何をどのように指導するのが有効かという、新たな問題も起こってきている。

このような状況にあるダンス指導実践は、現職教員を取り巻くさまざまな要因に影響を受けると思われるが、それらは、次の3点に大別されると考えられる。

1) 大学時履修経験

ダンス観・指導観を育て知識・技能を身につけさせて、意欲を持って指導に取り組ませる上で重要な要因である。

2) 指導経験

教育現場で学び身につけていく「ダンスの実践的経験(指導経験)」は、指導への意欲や実践力の向上に強く影響を与える要因である。

3) 指導に関する環境条件

所属学校内の組織・運用上の条件、学内外の再研修の機会や指導資料、学習指導を語り合い交換し合う仲間や研究会などの環境的条件は、指導実践へ影響を及ぼす大きな要因である。

つまり、小学校・中学校・高校におけるダンス指導は、現職教員の大学時履修経験や指導経験に支えられながら、教育現場における諸環境条件の中でさまざまな影響を受け、現状にあると考えられる。そして、これらの要因となる事項について

具体的に把握し、指導実践への前進が図れると考える。

中でも、「大学時履修経験」は自発的な指導実践を引き出す上で、基本的かつ重要な要因であると考えられる。先行研究(松本, 1991)によれば、「大学時の履修経験の違いは指導実践の有無に影響を与え、指導の好き嫌いや重視度に有為な差をもたらす。」と報告され、大学時履修経験の与える影響の重要さが指摘されている。

教員養成に関わる問題は早くからその重要性が指摘されているにもかかわらず、このように、現職教員の指導実践と大学での履修経験を結ぶ線上で語られることは少なく、また、教員養成大学の共通の問題として、全国規模で捉え論じようとする動きもこれまであまり見られない。

そこで、本研究では、「大学時履修経験」を中心とする要因に絞り、これまで教員養成大学で履修されている専門教育の期間・内容が現職教員のダンス指導実践にどのように生き、どのように影響を与えているかについて検討することとする。

さらに、同先行研究では、有効な指導実践に結びつく具体的履修期間や履修内容との関係が明らかにされておらず、また、県規模の小学校教員が対象であることから、結果が限定されている。そこで、対象を全国規模の小学校・中学校・高校教員に広げ、より一般化できる結論が引き出せるよう本研究を進めることとする。

このことは、教育現場の指導実践の充実発展に寄与するだけでなく、優れた教員を養成するという大学の役割を問い、教員養成大学におけるダンス教育のあり方について具体的示唆を与えると考えている。

尚、本研究は、日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門に属する、全国舞踊研究会会員の共同による、全国規模での現職教員に対する質問紙調査に基づいている。

〈研究目的〉

大学時ダンス履修経験の期間・内容を明らかにし、それらが現職教員のダンス指導実践にどのように有効に働いているかを検討する。それにより、教員養成大学における専門教育の有効性を検

証するとともに、有効な履修期間・内容を明らかにすることを目的とする。

〈研究方法〉

- 対象 (有効数) 公立小学校2,780名, 中学校1,259名, 高校834名, 計4,873名の現職教員(全国学校数の各々1割強にあたる)
- 調査期間 1991年8月～1992年1月
- 調査方法 質問紙調査
(全国規模での無作為抽出によるものであり、郵送法、一部は集合調査による。)
- 調査内容 次の5つの視点から構成されている。
①対象者の属性
②ダンス全般
(経験、好き嫌い・ダンス観)
③大学時履修経験
(経験期間、内容、印象、考え)
④指導経験(有無、指導の好き嫌い、自信、効果をあげた指導、障害)
⑤指導に関する環境条件
(講習会、指導資料、公開研究会)
- 分析方法 履修期間による群別比較(註1)
大学時のダンス履修期間により、次の3群に分け、履修内容、指導実践、ダンス観、指導観、指導能力などについて群別に比較する。
A群:履修期間が1年以上のもの
B群:履修期間が1年未満のもの
C群:履修経験が無いもの
(調査にあたっては5段階の尺度を用いたが、図1のように、1年未満が類似した傾向を示すことから、3群による比較とした。)
尚、分析にあたっては、奈良教育大学および筑波大学の大型計算機SPSSプログラムパッケージを用いて解析した。
(クロス集計の検定は χ^2 検定、残差分析を1%、5%水準で行った。)

〈結果と考察〉

1. 有効回答者の属性 【表1, 2】

(地域・性別・年齢・教職経験年数・専門実技)

本調査の回答は、次のような属性をもった対象によるものである。

回答者の所属地域は表1に示すとおりである。関東・中部・四国ブロックで全体の7割を占め、

調査結果は、これらの地域に多く負っている。

性別について男女比からみると、小学校教員は5:5、中学、高校では4:6となり、女性がやや多い。

年齢・教職経験年数の平均は、小学校、中学校、高校の順に高くなっている。また、小学校・中学校では教職経験14年以下が多く(20～30代)、8～7割を占めているのに対し、高校では5割である。このように、各教員間には世代並びに教職経験年数において差がみられ、高校教員は他に比べ世代も高く、経験も多い回答者である。

教員が専門とする実技については、小学校・中学校・高校とも球技が4～5割と一番多く、次いで陸上が1～2割、ダンス、器械体操、武道が1割弱である。

2. 大学での履修経験の差がダンス指導実践に及ぼす影響

1) 大学時履修経験 【表2】

有効回答者の大学時履修経験についてみると、A群は、小学校教員で2割強、中学・高校教員は5割強で、C群は各教員とも約3割である。小学校教員はB、C群が多いのに対し、中学・高校教員はA群が多く、小学校教員の経験の少なさが指摘される。

男女別の傾向をみると、男性では、各教員ともA群が1割強であるのに対し、女性は小学校で4割、中学・高校で8割強である。逆にC群は、男性が4～6割であるのに対し、女性は小学校で2割、中学・高校では1割に満たない。このように、履修経験は男性よりも女性の方に多く、この傾向は中学・高校教員に顕著である。

小学校教員に履修が少ないことは、大学時の法定履修教科である小学校教科専門科目の履修が多教科にわたること、また、体育教科の履修形態も必修、選択と、各大学に任されている為に(高橋1985年、松本1987年)履修期間の差異が大きいことなどが影響していると考えられる。

さらに、男女の履修差については、各大学により男女学生の履修単位や方式に区別がみられることや(高橋1985年、松本1987年)、男女の種目選択の違いによる影響が推察される。

2) 履修経験の差による指導実践の有無

まず、大学時履修経験(期間)の違いによって、教員になってからの指導実践が影響を受けるかをみるために、指導実践の有無を先の3群により比較する。【表3】

ここ1年間の指導実践は、各学校段階の教員とも約6割である。これを履修経験別に比較すると、A群では7～8割の指導実践であるのに対し、B群では5～3割の実践、C群では5～2割の実践である。

表1 ブロック別回答者数 単位=人(%)

	小	中	高
北海道	251(9.0)	22(1.7)	62(7.4)
東北	0(0)	0(0)	14(1.7)
関東	716(25.6)	435(34.6)	295(35.3)
中部	720(25.9)	225(17.9)	116(13.9)
近畿	111(4.0)	61(4.8)	58(7.0)
中国	328(11.8)	121(9.6)	73(8.8)
四国	567(20.4)	335(26.6)	187(22.4)
九州	87(3.1)	60(4.8)	29(3.4)
合計	2780	1259	834

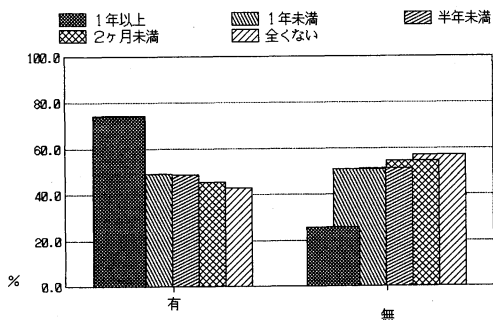


図1 履修経験による指導実践の有無 (中学校教員)

表2 対象者の属性 単位=人(%)

		小	中	高
有効回答数		2732(100.0)	1243(100.0)	809(100.0)
性別	男	1442(52.0)	537(43.2)	317(39.2)
	女	1310(48.0)	706(56.8)	492(60.8)
履修経験別	A群: 1年以上	690(25.3)	648(52.1)	452(55.9)
	B群: 1年未満	119(4.0)	290(23.3)	151(18.7)
	C群: 経験なし	923(33.8)	305(24.5)	206(25.5)
		小(男・女)	中(男・女)	高(男・女)
履修経験別 (%)	A群: 1年以上	15.1 · 36.3	13.4 · 81.6	10.7 · 85.0
	B群: 1年未満	41.7 · 40.2	37.2 · 12.7	31.9 · 10.2
	C群: 経験なし	43.2 · 23.6	49.3 · 5.7	57.4 · 4.9
有意水準	***	***	***	*** 0.1%
X ² 値	198.51	587.59	447.74	

表3 授業実践の有無(履修経験別比較 A=1年以上 B=1年未満 C=経験なし) 単位=%

	小A	小B	小C	中A	中B	中C	高A	高B	高C
有	65.2	53.5	49.8	74.4	48.2	42.8	75.7	32.4	17.7
無	34.8	48.5	50.2	25.6	51.7	57.2	24.3	67.6	82.3
合計(人)	681	1106	910	634	286	290	440	145	181
有意水準	***			***			***		
X ² 値	43.13			108.13			207.14		

このように、指導実践の割合は、履修経験1年を境に大きな差がみられ、他に比べA群が有意にダンス指導をしていることが認められる。また、その傾向は、高校教員で顕著である。

よって、履修経験の違いは指導実践に影響を与え、特に、1年以上の履修が有効であると言える。

3. 履修経験の差による指導観の違い

履修経験の差は、具体的にはどのような違いを生じさせ、指導への誘因となるのであろうか。考えられる指導への誘因としては、まず、ダンスに対する興味や関心、価値観、指導への意欲や好意的態度を持っていること、また、指導に役立つ知識や技術が身につけていることをあげることができる。

ここでは、これらの意識や態度の違いを明らかにし、指導実践への影響について検討する。

(1) ダンス観の違い

1) 履修後の印象とその内容 【表4、図2】

履修後の「表現・創作」に対する意識が「プラスに変化した」者は6割であり、「マイナスに変化した」者はほとんどいない。履修経験はダンスを肯定的に受けとめる結果をもたらすと見られる。これを履修経験別にみると、各学校段階の教員

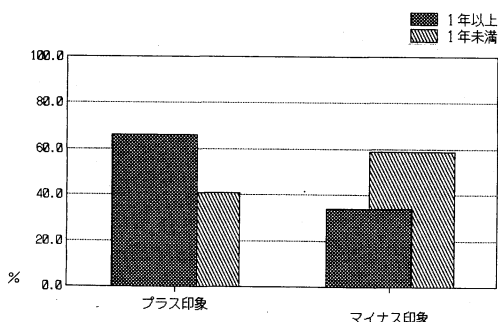


図2 履修経験によるダンス履修後の印象の違い (中学校教員)

とも、A群の7～8割が「プラスに変化した」と答え、「作品を創り上げた満足感・達成感」を印象の第1位にあげている。これに対し、B群では「プラスに変化した」「変化なし」と答えた者が各々5割前後を占め、「創作する難しさ」を印象の第1位にあげている。この結果は、A群とは対照的である。

さらに、印象についての内容項目を「作品を創り上げた満足感・達成感」などのプラス・イメージと「恥ずかしさ」「難しさ」などに代表されるマイナス・イメージに分けて比較する。その結果、B群の経験ではマイナスの印象がやや強いのに対し(5～6割)、A群では、8～6割の印象がプラスに属しており、充実した履修経験であることが認められる。

このことから、大学時履修経験によって「表現・創作」に対する意識は好転するが、ダンスの特質にふれさせダンス観をプラスに変容させるには、1年以上の履修が有効であると認められる。

2) ダンスに対する価値観

表現・ダンスは「児童・生徒にとって大切」と9割以上の者が考えており、履修経験による差は認められない。その理由についても、履修経験による差は無く、「感情を豊かにする」「リズムによって体力づくりが出来る」「表現・伝達の喜びを体験出来る」が第4位までにあがる。この結果から、表現・創作の本質的価値に判断の重点が置かれていると察せられる。

「ダンスを体育の中で重視しているか」については、約6割が「他領域と変わらない」と答えており、各教員とも履修経験による差はない。

しかし、残りの4割の者についてみると、特にA群に「重視する」傾向が強く、反対に、B群・C群は、体育の中でダンスを「重視しない」と回答するものが多い。この傾向は小学校、中学、高校と学校段階が進むにつれて強い。【表5】

B・C群の「重視しない理由」の1位には、「自

表4 履修後の意識の変化 (履修経験別比較 A=1年以上 B=1年未満) 単位=人 (%)

	小A	小B	中A	中B	高A	高B
プラスに変化	538(78.2)	552(49.4)	459(70.8)	137(47.4)	313(69.2)	62(41.1)
変わらず	137(19.9)	546(48.8)	168(25.9)	145(50.2)	129(28.5)	85(56.3)
マイナスに変化	13(1.9)	20(1.8)	21(3.2)	7(2.4)	10(2.2)	4(2.6)
合計	688(100.0)	1118(100.0)	648(100.0)	289(100.0)	452(100.0)	151(100.0)

有意水準
X² 値

152.87

52.87

39.12

表5 ダンスを体育の中で重視しているか
(履修経験別比較 A=1年以上 B=1年未満 C=経験なし) 単位=%

	小A	小B	小C	中A	中B	中C	高A	高B	高C
重視している	23.7	8.4	9.3	30.7	9.5	9.2	38.4	16.9	8.2
重視していない	14.2	28.5	26.9	9.1	24.0	27.1	7.2	19.7	26.2
他領域と変わらない	62.1	63.	63.8	60.2	66.5	63.7	54.4	63.4	55.6
合計 (人)	668	1097	881	626	275	284	432	142	195
有意水準 X ² 値		*** 26.67			*** 115.10			*** 93.03	

分に体験がないから」(5~7割)があげられている。このように、経験の不足はダンスの価値を見出す機会を失わせる傾向があると考えられる。

以上のことから、一般的認識としてダンスの価値は認められており、実際に体育指導の中で他領域と同様に扱われているが、履修経験1年を境に、実際に重視するかしないかに違いが現れ、A群が特に重視する傾向を持つと言える。

(2) 指導観の違い

大学時の履修は、指導に役立つ知識や技能を身につけさせ、有効な指導実践を保障すると考えられる。そして、有効な指導経験は、指導への愛好的態度を形成すると考えられる。そこで、このような指導観について3群を比較し、履修経験の有効性をみることにする。

1) 履修経験は指導に役立っているか【図3】

履修経験が「指導に役立つ」と答えているのは、A群では8割以上、B群では5~6割である。各学校段階の教員とも、A群に「役立つ」と評価する傾向が強い。

2) 指導への自信

指導実践を可能にするには、指導に関する諸能力が必要である。「授業計画を組むことができる」と答えているのは、A群では7~8割強であるのに対し、B、C群では4~6割であり、履修経験による差が認められる。また、高校、中学校、小学校の順で「できる」者が多い。

「計画を組むときに参考にするもの」への回答では、各教員とも、A群が「創り踊り観る大学時履修経験」を1、2位にあげている。それに対し、B、C群では、中学のB群を除いて、上位にあがらない。一方「指導に関する大学時履修経験」については、A群でも3~2割以下であり、指導計画立案の参考にされていないことが窺える。

このことから、「指導計画を組む能力」は、履修経験の影響を受けており、特にそれは、「創り踊り観る大学時履修経験」からであると言える。

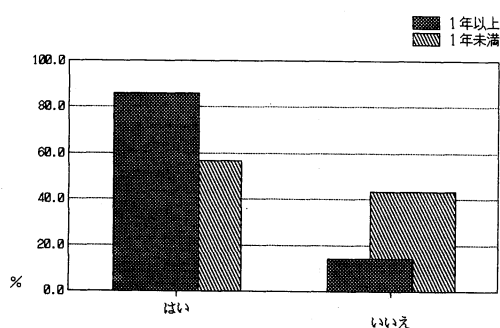


図3 履修経験への評価の違い
—役に立っているか— (小学校教員)

3) 指導の結果

小学校・中学校において、児童・生徒が「興味を持って取り組んだ」と回答しているのは、A群では8割、B、C群は約7割で、A群にその傾向がやや強い。高校では、A群の7割に対し、B、C群は4~5割にとどまり、その差が顕著である。

このことから、履修経験の違いは指導の成果にも影響を与えていると認められる。

4) 指導の好き嫌い【図4-1, 2】

指導の好き嫌いは指導の実践意欲に大きく影響する。逆に、指導実践の良否によって指導への好意的態度(好き嫌い)が影響を受けることも事実である。

先に、履修経験の違いによって、身についた指導能力の差が指導の成果に影響を与えることが認められていることから、指導の好き嫌いについて、3群間の違いを見ることは、結果として、そこに履修経験の影響を窺うこととなる。

そこで、「指導が好きか」の回答をみると、「好き」「段々好きになる」の「好き」群が、小学校教員では7割、中学・高校では6割を占める。小学校は全体に指導に好感を持っており、中学、高校となるに従い、好感を持てる者と持てない者に分かれていくようである。

これを履修経験別に比較すると、A群は、8～6割と「好き」群が多いのに対し、B、C群では、「嫌い」群が増し、高校のC群では「嫌い」群が6割となる。つまり、指導への好意的態度は履修経験の違いに影響を受け、特に、高校に顕著であると言える。

5) 指導の障害となること 【表6】

「表現・創作の指導の際に一番障害になる事は何か」への回答について、選択肢を「生徒」「教師」「環境」（施設用具、周囲の認識など学習指導に影響する環境的条件）の3つに分け、さらに、「教師」の項目を「表現創作への理解・実技能力」と「指導法の理解」に分けて履修経験別に比較する。

その結果、各教員とも、A、B群は第1に「生徒」の側に障害を捉えるのに対し、C群では、中学・高校教員が「教師」側の「表現創作への理解・実技能力」をあげ、それを障害と捉えるものが多い。小学校に比べ、中学・高校では指導内容がより専門的になり、教員にはそれに伴う最低限の「理解力と実技能力」が必要と考えられるが、C群では、この能力を身につけていないため、障害となっていると考えられる。

内容について詳しくみると、「生徒」側の問題は、有効な指導法と教師の指導能力によって解決

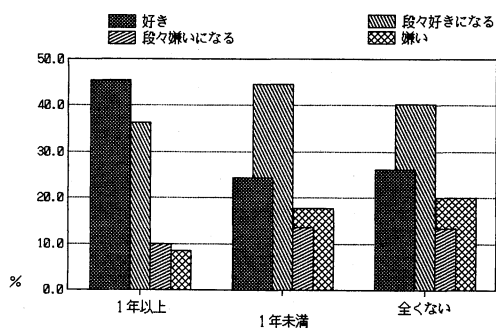


図4-1 履修経験による指導の好き嫌いの違い (小学校教員)

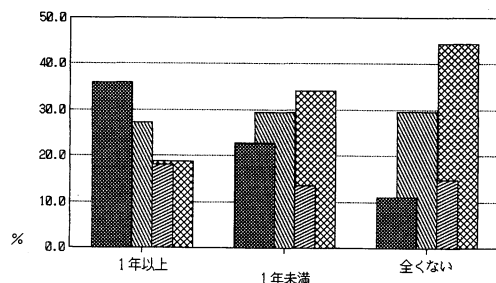


図4-2 履修経験による指導の好き嫌いの違い (高等学校教員)

表6 指導の障害 (履修経験別比較 A=1年以上 B=1年未満 C=経験なし) 単位=%

	小A	小B	小C	中A	中B	中C	高A	高B	高C
生徒が動かない	25.8	24.4	21.3	26.6	25.9	17.3	38.0	20.6	25.0
生徒の能力差	6.2	9.1	7.0	15.1	8.3	5.1	10.3	26.5	5.0
生徒が開放的になりすぎる	2.3	1.3	0.8	1.4	0.9	0	0.9	0	0
創作が理解できない	1.7	4.5	4.8	1.4	4.6	6.1	3.0	2.9	5.0
動いて見せられない	3.4	10.8	12.6	6.0	15.7	35.7	6.0	14.7	25.0
好きでない	5.1	6.6	5.9	7.1	9.3	7.1	4.3	11.8	5.0
助言がわからない	8.5	10.6	9.5	3.1	4.6	4.1	3.0	0	10.0
評価がわからない	4.5	4.9	4.2	8.3	2.8	4.1	3.8	0	0
内容がわからない	5.4	5.3	8.4	1.7	6.5	3.1	1.3	0	0
準備に手間がかかる	3.4	2.5	2.0	3.7	0.9	0	2.6	0	0
施設用具が不十分	2.5	0.6	0	0.9	0.9	1.0	6.0	2.9	0
学校の取り組み消極的	15.9	5.1	3.9	6.0	0.9	0	1.7	0	5.0
音楽がみつからない	5.7	3.8	4.2	3.4	1.9	1.0	5.1	2.9	5.0
よい指導資料なし	5.7	8.9	13.2	4.9	10.2	10.2	2.6	8.8	5.0
男女教員のアンバランス	0.3	0.8	0.3	2.9	3.7	4.1	5.6	5.9	10.0
合計 (人)	353	471	357	350	108	98	234	34	20

されると考えられる。しかし、「指導法の理解」を障害と捉える教員は、小学校を除いて少ない。つまり、「指導法の理解」では解決されない、より「実践的な指導法の把握や指導能力」に問題があると受け止めることができよう。

以上のことから、C群にみるような、「表現への理解や実技能力」などの「教師自身」の問題が障害と感じられる第1段階をクリアし、教員として最低限の能力を身につけて指導に向いやすくなるには、1年以上の履修を保障することが有効であると認められる。

また、A、B群については、さらに、「実践的な指導法や指導能力」を身につけるカリキュラム内容の充実が求められる。

4. 履修経験の差によるカリキュラム内容に関する意識の違い

履修期間の差は、履修内容の差となり、結果として指導実践に影響を与えると考えられる。ここでは、履修内容の違いを明らかにし、どのような履修内容が身につけていき、指導の場で役立つのか、自信を持って指導できる内容や、今後身につけたいと考える内容はどのようなものか、それらは履修期間の違いにより影響を受けるかについて検討し、履修期間と履修内容、履修内容と指導実践との関係を明らかにする。

履修内容については、「履修内容」「実技内容」の両面から、学校段階別、履修経験別にみていく。

(1) 大学時履修期間と履修内容との関係

どのような履修内容が取り上げられているかを、履修期間別に比較してみる。

履修内容については、4割以上が経験しているものを取り出すと、次のようになる。A群では、「本人の実技能力を高める」「児童・生徒の題材を体験」「指導計画の立て方」が3位までを占める。高校では、さらに「指導計画の立て方」が加わる。履修者の技能を高め、指導に関わる理論や指導に関わる実践的な内容や方法を身につけさせることが、基本的な内容として考えられている。これに対し、B群の小学校では、「本人の実技能力を高める」「児童・生徒の題材を体験」、中学校・高校では、「本人の実技能力を高める」のみで、経験が限定されている。【図5】

実技内容について、6割以上が経験している内容は、次のようになる。A群の中学校・高校では、「ステップ等の基本的な動き」「リズムによって動く」の、「踊る」に関する2項目を上位に、「即興」「発表会」「作品構成」「動きを見つける」「イメージを広げる」の、「創る」に関する5項目があがる。両面からの実技が経験されていることがわかる。小学校では上位の順位が変わるが、同様の項目があがる。B群では、中学・高校が上記

の2項目、小学校はそのうち1項目のみである。4割まで広げると、B群もA群と同様の5項目がある。【図6】

つまり、A群はB群に比べ、取り上げられる履修内容が多く、その割合も高く、B群の経験に対し差が認められる。

具体的には、A群、B群に、共通に履修されているのは「実技能力を高める」であり、「踊る」に関する「実技内容」である。小学校では、その他「児童・生徒の題材を体験」も共通に履修されている。これらは、最低の履修条件においても、経験させたい必須の内容と考えられているのであろう。そして、B群に比較して、A群に履修されているのは、「指導」に関わる内容や「理論」、「創る」に関する「実技内容」である。

(2) 大学時履修内容と指導実践との関係

1) 指導に役立つ履修内容 【表7, 8】

「履修内容」「実技内容」については、A群の5～7割、B群の4～6割（5割）が「役立つ」と回答している。

各学校段階とも、履修期間にかかわらず、上位にあがる「役立つ」内容には差が無い。

履修内容について、4割以上が「役立つ」とするのは次のような内容である。A群は、「実技能

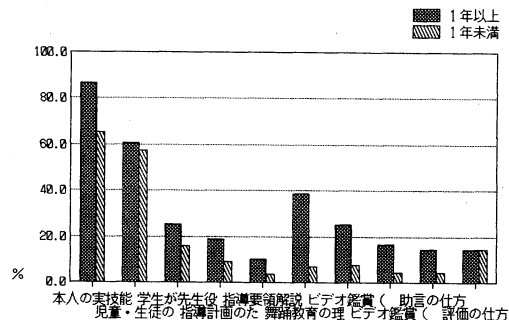


図5 履修経験による大学での履修内容の違い (小学校教員)

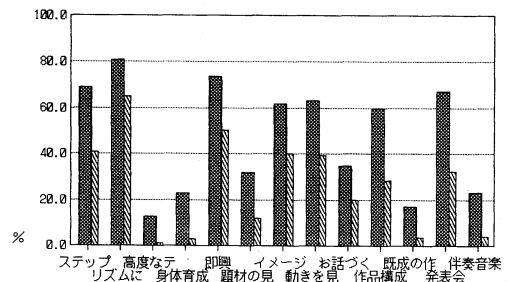


図6 履修経験による大学での実技内容の違い (小学校教員)

力を高める」に加えて、小学校では「児童・生徒の題材を体験」、高校では「指導計画の立て方」である。中学は「実技能力を高める」のみである。B群は、小学校が「児童・生徒の題材を体験」「実技能力を高める」、中学・高校は「実技能力を高める」のみである。

実技内容について、4割以上があげるのは、次のような内容である。A群の小学校では、「リズムにのって動く」「イメージを広げる」「動きを見つめる」の、「踊る」「創る」両面からの3項目、中学では「ステップ等基本的な動き」を加えた4

項目、高校ではこれら4項目他の計7項目である。B群については、小学校では該当するものがなく、中学・高校での「踊る」に関する2項目のみである。

つまり、A群はB群に比べ、「役立つ」内容が多く、その割合も高く、B群に対し差が認められる。

具体的には、A群、B群に、共通に「役立つ」とされているのは、小学校での「児童・生徒の題材を体験」と、各学校段階共通の「実技能力を高める」であり、「踊る」に関する「実技内容」である。また、B群に比較して、A群にあがるのは、

表7 指導に役立った履修経験（履修内容）（複数回答）
（履修経験別比較 A=1年以上 B=1年未満）単位=人（%）

	小A	小B	中A	中B	高A	高B
本人の実技能力を高める	270(52.1)	222(40.1)	255(58.1)	69(49.3)	195(68.9)	38(59.4)
児童・生徒の題材を体験	214(41.2)	245(44.1)	142(32.9)	32(32.9)	79(30.2)	13(21.7)
学生が先生役になって指導	74(14.2)	36(6.5)	37(8.6)	4(8.6)	26(10.3)	2(3.2)
指導計画のたて方	114(21.9)	85(15.3)	105(24.4)	36(24.4)	120(43.3)	15(24.2)
指導要領解説	35(6.7)	9(1.6)	10(2.3)	6(2.3)	28(11.0)	0(0)
舞踊教育の理念や理論	63(12.1)	17(3.1)	52(12.1)	13(12.1)	77(28.6)	4(6.5)
ビデオ鑑賞（作品鑑賞）	46(8.8)	21(8.8)	46(10.7)	9(10.7)	50(19.5)	7(11.3)
ビデオ鑑賞（授業実践）	39(7.5)	12(2.2)	33(7.7)	7(7.7)	41(16.1)	4(6.5)
助言の仕方	156(30.0)	88(15.8)	81(18.7)	24(18.7)	90(34.0)	8(12.7)
評価の仕方	81(15.6)	22(4.0)	53(12.3)	15(12.3)	68(25.5)	4(6.5)
合計	520	556	439	140	283	64

太字=上位4位

表8 指導に役立った履修経験（実技内容）（複数回答）
（履修経験別比較 A=1年以上 B=1年未満）単位=人（%）

	小A	小B	中A	中B	高A	高B
ステップ等の基本的な動き	202(37.5)	136(24.2)	230(50.9)	64(45.7)	195(68.9)	31(49.2)
リズムにのって動く	276(51.2)	214(38.2)	244(54.3)	59(42.1)	175(61.6)	29(46.0)
高度なテクニック	37(6.9)	5(0.9)	14(3.2)	4(2.9)	48(18.4)	1(1.6)
身体育成法	48(8.9)	11(2.0)	34(7.7)	6(4.3)	67(25.6)	9(14.3)
即興	178(33.0)	98(17.5)	148(33.0)	25(18.0)	132(46.5)	15(23.8)
題材のみつけ方	158(29.3)	96(17.1)	147(33.0)	30(21.3)	132(47.8)	10(15.9)
イメージを広げる	245(45.5)	172(30.7)	185(41.0)	50(35.2)	148(52.7)	16(25.0)
動きをみつめる	246(45.7)	180(32.1)	208(46.2)	38(26.6)	135(47.9)	18(28.1)
お話づくり	127(23.6)	65(11.6)	44(9.9)	5(3.6)	26(10.2)	2(3.2)
作品構成	167(31.0)	87(15.5)	173(38.6)	36(25.4)	139(49.6)	17(27.0)
既成の作品	41(7.6)	7(1.2)	32(7.2)	5(8.8)	54(20.6)	7(11.1)
発表会	92(17.1)	33(5.9)	104(23.2)	17(12.1)	95(34.7)	9(14.3)
伴奏音楽の選び方	74(13.7)	19(3.4)	59(13.3)	2(1.4)	73(27.4)	4(14.7)
合計	539	562	452	143	284	64

太字=上位4位

各学校段階とも、「創る」に関する「実技内容」であり、高校の「指導計画の立て方」である。

2) 指導の際に「自信を持って伝える内容」

「自信を持って行える内容」のうち「授業内容」については4～3割、「実技内容」については約3割の回答が得られている。数量的には少ないが、これらの回答から教員の指導に対する自信や能力についてみる事ができる。

各学校段階とも履修期間にかかわらず、上位にあがる「自信を持つ」内容には差が無い。

履修内容について、約4割以上が「自信を持って」のは、次の内容である。A群については、高校が「実技能力を高める」「題材の選び方」「視聴覚教材を使用しての指導」「助言の仕方」の4項目である。中学ではそのうちの上位2項目、小学校では「実技能力を高める」1項目である。高校が他よりも自信を持っている。B群については、小学校・中学校・高校とも該当無しである。当然のことながら、経験の少ないB群には自信が無い。

同様に、実技内容についてあがるのは、次の内容である。A群の高校では、「リズムにのって動く」「ステップ等基本的な動き」の「踊る」に関わる2項目を上位に、「イメージを広げる」「動きをみつける」の「創る」に関わる2項目である。中学では、「踊る」に関わる2項目、小学校では1項目である。B群では、中学校、高校が「踊る」に関わる2項目、小学校は1項目のみである。

つまり、A群はB群に比べ、「自信を持っている」内容が多く、その割合も高く、B群に対し差が認められる。

具体的には、A群、B群に、共通に「自信を持っている」とされるのは、「踊る」に関する「実技内容」のみである。また、B群に比較して、A群が「自信を持っている」のは、「実技能力を高める」と「指導」に関わる内容（中学は1項目、高

校は3項目）であり、高校での「創る」に関する基本的な「実技内容」である。幅広い内容があがっていることがわかる。【表省略】

3) 「今後身につけたい内容」 【表9, 10】

「今後身につけたい内容」についての回答は、「履修内容」「実技内容」ともに回答者の約3割である。単数回答であるため分散し、1項目あたりの占める割合が低くなっている。

「履修内容」については、2割以上が「身につけたい」とするものは、次のような内容である。

履修期間の別なく、どの学校段階の教員も「実技能力を高める」「助言の仕方」である。1割まで広げると、中学のB群を除いて、「指導計画の立て方」が共通にあがる。

「実技内容」について、約2割があげる内容は、次のようなものである。A群については、高校が「高度なテクニック」「動きをみつける」であり、中学が「作品構成」、小学校が「題材の見つけ方」である。B群については、高校が「イメージを広げる」「作品構成」「ステップ等の基本的な動き」、中学が「動きを見つめる」、小学校が「イメージを広げる」「ステップ等の基本的な動き」である。

つまり、「身につけたい」内容については、履修期間の違いに関わらず同様の内容が求められており、差が無い。しかし、実技内容については、履修期間、学校段階により、「身につけたい」内容が段階化しており、各々にふさわしい内容が求められていることがわかる。その内容は「踊る」よりも、「創る」に関わる実技内容がより求められている。

4) まとめ

以上のことを総合すると、次のようにまとめられる。

①役に立ち、自信を持って指導できる内容につ

表9 身につけたい内容（履修内容）

（履修経験別比較 A=1年以上 B=1年未満 C=経験なし）単位=人（%）

	小A	小B	小C	中A	中B	中C	高A	高B	高C
実技能力を高める	76(29.0)	122(31.6)	92(33.9)	83(30.3)	38(45.2)	25(36.2)	64(36.6)	9(39.1)	9(60.0)
題材の選び方	26(9.9)	68(17.6)	39(14.4)	22(8.0)	7(8.3)	6(8.7)	11(6.3)	2(8.7)	0(0)
計画の立て方	27(10.3)	41(10.6)	21(7.7)	42(15.3)	5(6.0)	5(7.2)	22(12.6)	3(13.0)	2(13.3)
指導要領解説	4(1.5)	4(1.0)	3(1.1)	5(1.8)	1(1.2)	1(1.4)	3(1.7)	0(0)	0(0)
理念や理論	8(3.1)	9(2.3)	10(3.7)	7(2.6)	2(2.4)	1(1.4)	6(3.4)	0(0)	0(0)
評価の仕方	32(12.2)	35(9.1)	20(7.4)	20(7.3)	7(8.3)	6(8.7)	16(9.1)	1(4.3)	2(13.3)
助言の仕方	61(23.3)	88(22.8)	67(24.7)	63(23.0)	17(20.2)	16(23.2)	39(22.3)	5(21.7)	1(6.7)
視聴覚教材	28(10.7)	19(4.9)	19(7.0)	32(11.7)	7(8.3)	9(13.0)	14(8.0)	3(13.0)	1(6.7)
合計	262	386	271	274	84	69	175	23	15

太字=上位3位（3～5項目）

表10 身につけたい内容（実技内容）

(履修経験別比較 A=1年以上 B=1年未満 C=経験なし) 単位=人(%)

	小A	小B	小C	中A	中B	中C	高A	高B	高C
ステップ等の基本的な動き	26(10.7)	64(17.5)	49(19.2)	19(7.5)	8(10.4)	24(36.9)	9(5.4)	4(16.7)	3(30.0)
リズムによって動く	21(8.6)	34(9.3)	30(11.8)	15(5.9)	8(10.4)	4(6.2)	17(10.2)	1(4.2)	1(10.0)
高度なテクニック	1(0.4)	23(6.3)	6(2.4)	23(9.1)	7(9.1)	2(3.1)	30(18.0)	3(12.5)	0(0)
身体育成法	30(12.3)	11(3.0)	11(4.3)	17(6.7)	6(7.8)	1(1.5)	11(6.6)	1(4.2)	1(10.0)
即興	15(6.1)	17(4.6)	9(3.5)	16(6.3)	3(3.9)	3(4.6)	5(3.0)	0(0)	0(0)
題材のみつけ方	55(22.5)	27(7.4)	12(4.7)	18(7.1)	5(6.5)	7(10.8)	8(4.8)	0(0)	0(0)
イメージを広げる	12(4.9)	68(18.6)	59(23.1)	36(14.2)	9(11.7)	8(12.3)	24(14.4)	5(20.8)	2(20.0)
動きをみつける	11(4.5)	35(9.6)	36(14.1)	28(11.1)	12(15.6)	6(9.2)	25(15.0)	1(4.2)	2(20.0)
お話づくり	17(7.0)	11(3.0)	4(1.6)	1(0.4)	3(3.9)	2(3.1)	1(0.6)	0(0)	0(0)
作品構成	22(9.0)	47(12.8)	26(10.2)	47(18.6)	8(10.4)	4(6.2)	19(11.4)	4(16.7)	1(10.0)
既成の作品	2(0.8)	3(0.8)	1(0.4)	3(1.2)	1(1.3)	0(0)	3(1.8)	2(8.3)	0(0)
発表会	24(9.8)	1(0.8)	0(0)	4(1.6)	0(0)	2(3.1)	3(1.8)	0(0)	0(0)
伴奏音楽の選び方	6(2.5)	21(5.7)	10(3.9)	22(8.7)	7(9.1)	1(1.5)	8(4.8)	3(12.5)	0(0)
合計	244	366	255	253	77	65	167	24	10

太字=上位3位(3~5項目)

いては、各学校段階とも、履修期間の違いに関わらず、上位に上がる内容はほぼ共通である。しかし、その内容数や割合に差が認められ、A群がB群に比べ、履修による成果をあげている。特に「指導」に関わる内容と「創る」に関わる実技内容において違いが認められる。このような履修内容の違いが、結果として指導実践に影響を与えていると考えられる。

②今後身につけたい履修内容は、学校段階、履修期間の違いに関わらず、ほぼ共通である。「実技能力を高める」「指導」に関わる内容が特に求められている。実技内容については、履修期間や学校段階の違いにより差があり、段階化している。養成課程や履修段階にふさわしい内容が求められており、現在の課題が窺われる。

5. 今後のダンスカリキュラムの検討

履修内容は、「限られた時間内で何を身につけさせたいか」という、大学教官の願いやダンス教育の内容に対する価値観の反映であろう。ここでは、これまでの結果から、教員養成大学の各課程におけるカリキュラムの実際を読み取り、今後求められるダンスカリキュラムについて検討を加える。

1) 総論的検討

教員養成に向けたこれまでのダンスカリキュラムは次のような考え方に基いて行われていたと考えられる。

学校段階に関わらず、共通に経験された内容は、「本人の実技能力を高める」「児童・生徒の題

材を体験」「舞踊教育の理念や理論」である。養成に向けて、履修者の「踊る」「創る」両面に渡る技能を高め、舞踊教育に関わる「理論」や「指導」に関わる実践的な内容と方法を身につけさせることが必要と考えられている、と解される。

中でも、「踊る」に関わる基本的な実技と、その「能力を高める」ことは、期間が短く履修の条件が悪いB群においても、6~8割に履修されており、いわば必須の内容と考えられている、と解される。

上記のような経験を持って、7~8割が指導実践をしているA群については、次のことが示唆される。身につけたい「助言の仕方」「指導計画の立て方」などの「指導」に関わる内容は、履修されている割合が低く、役立つと評価されるまでに至っていない。また、「創る」に関する「実技内容」は、「踊る」に比べ、自信を持って指導できない。つまり、これまでの履修では、「指導」に直結するような内容が不十分であり、特に「創る」活動の指導に自信を持てるような履修の深まりが求められると解される。

B群については、A群に比べ不足している「指導」に関わる内容や「理論」、「創る」に関する「実技内容」を充実することが必要であろう。

2) 課程の特性に応じた内容の検討

各教員養成課程における履修の特徴は、次のようにまとめられる。

小学校では「実技能力を高める」「題材の体験」が大切にされているのに対し、高校では、「実技能力を高める」「舞踊教育の理論」が重視されて

いる。中学校は両者の中間的な傾向を持っているが、「実技能力を高める」が主として履修されている。小学校ではより指導実践的に、高校ではより高度な技能と理論を、という考え方が読み取れ、各課程にふさわしいものを取り上げられていると言える。

総論的検討で述べたことに加え、各学校段階の履修については、次のことが示唆される。

小学校、中学校、高校と学校段階があがるほど、「役立ち」「自信を持てる」内容が多くなり、履修の成果をあげている。このように小学校は他に比べ履修期間も短く、自信を持てる内容が少ないので、履修の特徴である「題材の体験」をさらに充実させ、指導実践に自信を持って取り組めるようにさせたい。

中学・高校では「実技能力を高める」に比べ、「題材の体験」の履修は低い。技能を高めることが中心になりやすく、指導実践を意識した履修がそれに比べ少ないので、さらに充実が必要であろう。

反対に、小学校・中学校では、「舞踊教育の理論」の取り扱いが低く、意識されていない。しかし重視されている高校においても、「役立つ」と考える割合はやや低い。指導実践に生きる「理論」であるのかについて吟味を加えた上で、導入についての検討が必要であろう。

また、「実技内容」については、学校段階に応じて、「題材のみつけ方」、「作品構成」、「高度なテクニック」が求められている。ここに、小学校・中学校・高校の特徴と現在の課題が窺えるが、学校段階の課題をさらに明確に規定し、履修を充実させたい。

3) まとめ

これまで見てきた結果では、8割以上の者は履修した内容は、半数の者にその有効性が意識されている。そこで、カリキュラム上の保障を高め、成果をあげるには、指導実践につながる主要な内容について、少なくとも8割以上が共通に経験するよう目標を持ちたい。

B群においては、限られた履修機会を生かせるようにするため、できるだけ有効な、中心的内容を取入れ、履修の目標に近付けて成果をあげたい。

〈結論〉

これまでみてきたように、大学履修経験の期間は内容を規定し、ダンス観、指導観、指導能力に違いをもたらす。そして、この違いが指導実践への有効性に影響を与えていることが具体的に明らかになった。また、各学校段階に応じた指導には、どのようなダンスカリキュラムが有効であり、今後求められる内容は何か、についても具体的な指針を得た。

以上のことから次のことが結論される。

①大学時履修経験の差はダンス観、指導観、指導能力などに影響を与え、指導実践をおこなわせる原動力に成る。特に1年以上と1年未満・経験無しとの間に大きな違いがみられ、1年以上の大学履修経験が、特に、有効に働くことが認められる。

②大学時に履修される中心的内容は、それらの重要性において、履修経験の差による違いは認められない。しかし、それらが履修されている内容数や割合において、1年以上が他より充実しており、履修経験の差による違いが認められる。

③大学時履修内容について、指導実践を進める立場から評価すると、役立ち、自信を持ってできる内容は、その順位性において履修経験の差による違いは認められない。しかし、その内容数や割合において、1年以上がより充実しており、履修経験の差による違いが認められる。

④1年以上に比較して、1年未満が不足しているのは、「指導」に関する内容や「理論」であり、「創る」に関する実技内容である。

⑤今後、身につけたい内容や必要と考察される内容は、「指導」に関わる内容と、履修期間や学校段階に応じた「創る」に関わる「実技内容」である。

⑥前述の①～③については、各学校段階とも、その傾向が認められるが、小学校、中学校、高校と学校段階が上がるにつれ、その傾向が強くなり、特に、高校が履修経験の差による影響を強く受ける。

このことは、各学校段階で求められる専門性の高さの違いがあるため、必要とされる履修期間・内容・成果のレベルの違いがあるためと考えられる。

〈おわりに〉

本結果をふまえて、教員養成大学においては、期間・内容についてのカリキュラムの充実を図り、さらに、指導実践につながる認識や能力を育てたいと考える。

〈付記〉

尚、本稿は研究プロジェクト「ダンス指導実践に関わる現職教員の意識」（平成4年舞踊学会及び体育学会に計4報発表）のメンバーにより、小学校・中学校・高校担当各2名およびプロジェクト担当責任者松本により分析考察をおこない責任執筆した。調査用紙作成・調査・データ入力・データチェック・解析にかかわった全国舞踊研究会会員（註2）ならびに協力者（註3）の共同研究によりまとめたものであることをここに記し、心より感謝したい。

〈参考文献〉

- 1) 松本富子・国枝たか子・畑野裕子・神戸周：ダンス指導実践に関わる現職教員の意識——選択性実施の可能性と課題について——，日本体育学会43回大会，1992年
 - 2) 畑野裕子・茅野理子・三浦弓杖・松本富子：ダンス指導実践に関わる現職教員の意識——小学校を対象として——，舞踊学会，1992年
 - 3) 佐分利育代・廣兼志保・中村久子：ダンス指導実践に関わる現職教員の意識——中学校を対象として——，日本体育学会43回大会，1992年
 - 4) 高橋和子・川口千代・須郷京子・細川江利子：ダンス指導実践に関わる現職教員の意識——高校を対象として——，日本体育学会43回大会，1992年
 - 5) 松本富子：群馬県小学校における表現運動指導の現状と充実への課題，日本教育大学協会保健体育・保健研究部門第11回全国創作舞踊研究発表会研究紀要pp.28-33，1991年
 - 6) 松本富子，松本恵美：表現運動指導における課題と方策——群馬県小学校の現状と教育実践を促進させる要因の検討から——，群馬大学教育実践研究第9号，pp.125-147，1992年
 - 7) 佐分利育代，井上茂子：壘学校におけるダンス指導，鳥取大学教育学部研究報告，教育科学第33巻第1号，pp.65-79，1991年
 - 8) 茅野理子，森島明子：栃木県下中学校におけるダンス指導の実態について，日本教育大学協会保健体育・保健研究部門第10回全国創作舞踊研究発表会研究紀要，pp.16-19，1990年
 - 9) 三沢共香：ダンスの授業に関する実態調査，第24回全国女子体育研究大会神奈川大会神奈川県女子体育連盟中学校部会紀要第37号，1989年
 - 10) 原田奈名子，北野啓子，ダンスにおける男と女——保健体育教師を対象として——，長崎県立女子短期大学研究紀要第37号，1989年
 - 11) 松本富子他：小学校教員養成課程のための舞踊カリキュラムの研究，日本教育大学協会保健体育・保健研究部門第7回全国創作舞踊研究発表会研究抄録，pp.2-4，1987年
 - 12) 家木真貴子：女子学生の身体表現に関する意識，日本教育大学協会保健体育・保健研究部門第7回全国創作舞踊研究発表会研究抄録，pp.20-22，1987年
 - 13) 飯田恭子，林真幾子：体育科教員養成課程における学生のダンス観について，日本体育学会第37回大会，1986年
 - 14) 高橋和子他：舞踊教育におけるカリキュラムについて——日本教育大学協会所属大学の場合——日本教育大学協会保健体育・保健研究部門第5回全国創作舞踊研究発表会研究抄録，pp.21-27，1985年
 - 15) 柴真理子：教員養成大学における舞踊教育について——ダンスの体験を通してのダンス観の変化——，日本体育学会第34回大会，1983年
- (註1) 履修の量的把握は，通常，単位数により規定できるが，各大学の該当授業が講義・演習・実技それぞれの扱いにより行われている事実から（高橋1985年，松本1987年）取得する単位数を分類の基準とすることが困難であったため，回答者が判断し回答しやすい履修期間を基準とした。
- (註2) 松下清子・高橋芳子・鈴木裕美子・野田寿美子・東原芳美・遠藤保子・亀井恭子・福原昌恵・津田史枝・斉藤千代子・後藤洋子・松尾千秋・安藤幸・岸純子・坂下玲子・原田奈名子・高橋るみ子・麻生和江（敬称・所属略）
- (註3) 本研究のデータ入力，解析にあたって岡沢祥訓・神田大吾・中井隆司・長谷川悦志（敬称・所属略）の皆様へ惜しみないご協力をいただきました。